

『シダは雪獅子さまのもの』

著：鳥舟あや

ill：石田 要

「シダ殿が陛下の御子を産めばよろしいのです」

満場一致の結論に至った……と、政庁の文武官たちは実に満足げな様子で上奏した。

朝一番に呼び出されたシダは、「なにを仰るかと思えば……」と呆れて己の職場に戻ろうとしたが、「我々はようやく目の前の真実に気付いたのです」と年寄り連中に手を引かれ、その手を強引に振り払うこともできず、背後のウェイシを仰ぎ見た。

大切な話があると言われ、寝ていたところを起こされたウェイシは、「ふぁ……、あーあぁ」、と大欠伸だ。

「陛下との親密度、これまでも陛下の発情期にお世話をなさってきたという実績、それになにより陛下に対する絶対的な服従心と思慕……それらを鑑みれば、自ずと結果は明白です。この際、もう種族の壁やら血筋や血統などと言っている場合ではありません」

「シダ殿、ご安心ください。なにも貴殿を皇后に据え置こうなどという気は努々ござりませぬ。ただ、陛下の御子の母胎になっていただきたい……と、我々はそう申しておるのです」

「シダ殿はこれからも西廠提督としての任に就いてくださって構いません。ただ、その胎を、この国の為に貸してくださればよいのです」

年寄りの臣下たちは、矢継ぎ早にシダに畳みかける。

シダが、「国家の為に働くことは、それ即ち陛下の為になる」という大義名分に弱いことを知っていて、王の子の母になることを求めているのだ。

求めてはいるが、これは、ほぼ決定事項だ。彼らの手には、既に、出産計画書やシダにかんする今後の扱いなどをまとめた草案が握られていて、そして、その通り実行する前提で行動し、シダの同意を得るつもりなどない。

「お断りいたします」

それでも、シダは即座に拒否を示した。

続けて、「自分は、雪獅子とヒト喰いの交雑種です。この国では、圧倒的に身分が低くあります。第一、国家の為とはいえ、このシダがどれだけの命を奪ったか、どれだけのヒトや獣を屠り、喰ったかは、陛下を含め諸侯方もよくご存じのはず。皆々様方は、ヒト殺しを陛下の御子の母にするおつもりですか」と玉座のウェイシにも聞かせるように話した。

ウェイシは一国の王だ。王なのだから、もっと位の高い嫁が必要だ。

よしんば身分が低くとも、まっとうな人間でないといけない。

シダが至極もったもなことを言うと、家臣団は黙りこんだ。

「それより、シダは、この首府の治安問題が気がかりです。昨夜、南の血狼族とルアクタ州のシユ工族の間で不穏な動きがあると部下から報告を受けました。これは看過できぬ事態です。シダは子作りをする時間があるなら、働きます。……第一、腹ボテで仕事ができるものか」

極めつけのダメ押しをして、後半は吐き捨てるように彼らの要求を突っぱねた。

「シダ殿は、陛下の御子を産む名誉はおいやですか？」

「いやです」

いやなわけがない。ウェイシの子を産めるのだ。いやなはずがない。大歓迎だ。けれども、それは言葉にしてはならない考えだし、そんな心情を悟られるようなことがあってもいけない。だから表情も変えないけれど、本心では、こんな名誉な話はないと思っている。

だって、この世で一番強くて、恰好良くて、最高のオスの子が産めるのだ。

こんな喜び、他にない。

でも、むりだ。だめだ、そんなの絶対むりだ。尊敬する命の恩人みたいな男と子供を作るようなことをしたら、幸せすぎて死んでしまう。それに、シダは幸せで死んでしまうくらい幸せだけれども、もし、本当にウェイシの子供を産んでしまったら、その子があまりにも可哀想だ。

ああ、だめだ、頬がゆるむ。もっときっちり断固固辞して見せて、この馬鹿みたいにゆるんでふにゃふにゃの恋愛脳みたいな脳味噌の思考回路を隠さねば……。

「シダ殿も実はそんなにいやではないでしょう？ そこをなんとか……っ！」

「なりません」

だめだ、これ以上、追い継られたら、「……まあ、子供くらいなら……」と、押し負けそう。 「陛下の為に！」と言われると、シダが断りにくいことを全員が理解しているから始末に悪い。ウェイシのことにかんしては、シダは押しに弱いと全員が知っているのだ。

陛下の御為という言葉在前面に押し出して頼みこめばなんとかなると思っている。

「陛下、お助けください」

シダは、玉座のウェイシを仰ぎ見た。

「確かに、コレにはシモの世話になっているが、それはあくまで事務的な処理のそれであって、情の問題でいうと、コレとはもう嫁を通り越して家族や血肉の一部なんだ、それを今更……」

ウェイシが言葉途中で黙りこみ、シダを見やった。

「陛下、どうなさいました？」

「そうか……、俺が嫁をとったら、俺の一番はお前じゃなくなるのか……」

「はあ？」

シダは盛大に首を傾げ、ひとまず、腕を掴んで離さない老人たちを引き剥がした。

大股歩きでウェイシの傍らへ近寄り、その足もとへ跪いてその手を握り、あざとい上目遣いで、「陛下、どうか彼らの愚かな考えを捨てさせてください」と頼みこむ。

「そうは言うけどな……俺が結婚したら、これから先、俺は、嫁のことを一番に考えて、嫁と一番長い時間を一緒に過ごして、嫁と夜遅くまで語り合っ、朝一番にお前じゃなくて嫁の顔を見て、休みの日はお前とずっと一緒にいたのに嫁と過ごすことになって、毎日、嫁と笑い合っ、祭りの日には嫁と城を抜け出して……、これから先の長い人生、顔も分からず、存在するかもどうか分からん未来の嫁と人生を一番長く共にしないといけないんだぞ」

「……それは、その通りでしょう……、伴侶なのですから……」

「お前、それでいいのか？」

「い、いいも……悪いも……だって、その、……ですから、自分は陛下が結婚なさろうとも、これまでと変わらずお傍におりますし、共に公務に励みますし、なにひとつ変わらず……」

……傍にいられるのか？ いままで、ずっとべったりくっついて、二人で一つみたいに生きてきたのに……これからもそうできるのか？

できないだろ？

……だって、ウェイシが結婚したら、ウェイシは嫁を一番に優先するのだから……。

そして、実際にそうなった時、自分はその現実を受け入れられるか？

「シダ、お前、本当にそれでいいんだな？」

「……で、すが……、いきなり、陛下と恋愛をしろなどと言われても、困りますし……」

この男は、もう家族で、一心同体で、離れられないのだ。

今頃になって、「好きだ、愛だ、子作りだ」……などということはできない。

一緒には戦えるが、一緒に子供を育てる未来なんて、シダは想定していない。

「お前と俺が長く共に過ごすには、お前を嫁にするのが一番だと思わないか？ 俺はそう思う、うん、そうしよう！」

「話が飛躍しすぎです。何故そうなるんですか。いまのままでも充分でしょう？」

「だって、お前の一番が俺以外になるのはいやだ」

「……？」

「将来的に、お前が嫁や婿をもらった時に、お前が俺よりも家庭を大事にしたらどうする？」

「シダは陛下を一番に考えます。ですから、家庭は蔑ろになるでしょうから、結婚しません。それに、自分は……仮に結婚ができたとしても、子供は作らない主義ですので……」

シダは、雪獅子とヒト喰いの交雑種のせい、性別の分化がうまくいかなかった。

通常、雪獅族は雌雄同体で生まれ、ヒト喰いは中性で生まれる。

純粋な雪獅族も、シダのようなヒト喰いも、ある一定の年齢になると性別分化する。

ただ、その分化の過程で、シダのようなあいの子の場合、ヒト喰いの中性性が邪魔をして、稀に、オスの体のまま子宮が退化せず、妊娠を可能とする個体が発生する場合があった。

結果として、シダの胎には子宮が残っている。

そして、いま、この胎に残っているメスとしての機能を求められている。

もしそうだとしても、この子宮が使いモノになるかどうかは分からない。

ヒト喰いは、性交渉しても種が定着しにくいのだ。

「それでも、……この胎は……」

シダは、力を籠めて自分の下腹を押さえた。

十年近く前、シダは成長期を迎え、性別分化の時期がきた。

その時に、医者からは、「君はメスを孕ませる心配よりも、オスに孕まされる心配をしたほうがいい」と忠告された。

だから、つまり、この胎は……。

「お前がメスと子作りするつもりがないなら、それはそれでいい。上に乗られないように注意さえしていれば……。……でも、お前とよそのオスとの間に子ができる可能性はいくらでもある。

……お前は、そういうことにかんしてはひどく隙が多いから……」

ウェイシは玉座の肘掛けから腕を下ろし、シダの腰を抱いて膝に乗せる。

「陛下……ここで、そういった戯れは……」

「お前が、俺以外のオスの種で孕むんだぞ？」

「い、たい、……痛いですが、陛下、痛い……っ、ウェイシ、痛い……っ！」

シダの腹を、ウェイシが強い力で圧迫する。

太い腕が、シダの左の腰骨から右の肋骨までをひと抱えにして抱きしめる。

シダは、その重くて固い腕を両手で掴み、引き剥がそうともがくが、びくともしない。

これだからいやなのだ。ウェイシと自分の、この、圧倒的な差。一般的な雪獅族のオスを相手にするのは訳が違う。筋力も、腕力も、骨の太さも、何もかもがウェイシに劣る。それは当然のことで、ウェイシに敵わないことはちっとも悔しくないのだが、こうして抱きすくめられると、ウェイシを守るべき自分がひどくメス臭い生き物のように思えて、恥ずかしい。

「……お前、こんなに細かったか？」

ウェイシは、シダの抱き心地にまたひとつ眉を吊り上げた。

重ね着をしたシダの服の下に隠された四肢の抱き心地は、思ったよりも悪い。

「俺はいつもこんなものですし、これでもそこらの人間よりは遅しいです。……それより陛下、放してください……っ、苦しいです、……陛下……っ！」

「お前、……お前自身が、よそのオスとの間に子ができたらどうする？」

「どう……って」

「もちろん、お前が孕まされる側だ。……お前、その子を産んだら、可愛がるだろ？ お前は優しく、生真面目で、ひたむきで、立派な性根を持っているから、きっと、誠心誠意、夫と子に尽くすはずだ。俺はそれを知っている。いままでお前は俺にそうしてきたからな。お前がそういう正しい生き物だって、俺が身を以て知っている。……だから、お前は家族を持ったら、きっと、絶対に、家族を一番大事にして、俺を一番にしない」

「……………人柄を誉められているのに……なぜでしょう、その言葉は素直に喜べません」

シダは他のオスと番うつもりはないし、この人生、これまでも、これからも、ウェイシに捧げて、永遠にウェイシひと筋で、よそ見なんかしている暇はない。

「お前、俺以外を愛すのか」

「ですから、俺は誰かと番うつもりはありません」

「でも、今後はどうなるか分からない。お前にそのつもりがなくても、発情して正気を失ったよそのオスに襲われて、その種で孕まされるかもしれない」

「返り討ちにします」

「俺に勝てないのに？」

「いや、あなたは周りに敵なしってくらい強いじゃないですか。それと比べないでください。だからっ……痛い……ウェイシ、……ウェイシ！ 力、強い、強いんだって……腹、潰れる」

「お前、もう俺の嫁になっておけ」

「頼みますから、話を聞いてください。冷静に、一緒に、国益を追求しましょう？」

「いやだ。……ああ、だめだな、ほんと……お前が俺の物だっていうことに安心しすぎてた」

シダの顔や体がウェイシの好みだということは、大抵の雪獅子もまた好む見目や肉づきであるということ。ウェイシが誉めそやすシダの勤勉かつ愛らしい心根は、多くの者の心もまた惹きつけるということ。そんなことは分かっていたはずなのに、シダという存在が当然のように傍にありすぎて、シダの言動に安心して、それを困り込むことを疎かにしてしまっていた。

「美人は三日で慣れるって本当だな」

出会った日からずっと目の前にこんな器量良しがいたら、そりゃ、他に食指も動かないし、この美人に慣れて、この美人が普通だと思ってしまう。

「……しっかりしてください、陛下。物事はよく考えて……」

「だって、嫁にするならお前しかいない。よし、お前が嫁だ」

「……………そんなこと、勝手に決めないで……ください」

言葉ではそう言っているが、いつの間にやら抵抗をやめて、おとなしくウェイシの膝に座ってしまっている。

身に沁みついたこの習性はどうにもならない。

ウェイシが決めたことは絶対。犬にも似た根性が、シダを服従させる。

自分のことをウェイシが決めてくれるのが嬉しくて、ウェイシに求められていることが喜びで、ただそれだけの事実には縛られて、ウェイシの意見に従う方向へ流れてしまう。

ウェイシの為を想うなら、もっとちゃんと断らなくてはいけないのに断れず、自分はなんて意志薄弱なのだろう……と幻滅してしまう。

だって、一刻の気の迷いでも、ウェイシが「シダを嫁にする」と公言してくれたのだ。

幸せで死んでしまう。

「……………嫁って、具体的になにが求められてるんですか……？」

子供を産めばいいだけですか？

そんなことを前向きに尋ねてしまう。

「俺の為に幸せに生きて……俺の為に長生きするようによく寝て、俺の為に健康であるようよく食べて……ずっと俺の傍で幸せにしていればいいと思うぞ」

「いままでもやってきたことじゃないですか……」

ウェイシの為に、仕事の鬼としてまっとうに生きて、ウェイシの為に長生きすることだけを考えて、ウェイシの為に働いて、ウェイシの利益追求の為に長生きして、よく働く為によく寝て、健康でなくてはたくさん働けないからよく食べて……ずっとウェイシの傍にいて、ずっと、ずっと、ずっと……この人の為だけに生きて……、ただそれだけで、しあわせ。

いままでと一緒だ。

そう考えると、「嫁になっても別に構わないのでは？」と思考がぐらつくが、すぐに我を取り戻し、「いやいやいや、自分は、陛下の御子を産む器ではありません」と縦に頷きかけた首を横にして、やっぱりその決定を突っぱねた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>